

**学校での分析** 国語は基本的な知識を定着させる取り組みが必要であるのと、例年と同じ傾向であるが、自分の考えを書くことに抵抗がある。目的を持って書き、生徒同士の意見交換をする授業づくりをする必要がある。数学はA、Bともに国県平均を下回ってはいるが、一人2問多く正答すれば平均点になる。B問題では判断の理由を数学的用語を使って説明する力を個々の到達度に応じてつける必要があり、現在は少人数指導を行っていないが習熟度を含めて授業形態を変えていく必要がある。

## 2. 生活実態について全国や県との比較結果

### 小学6年

昨年と比べて生活習慣の乱れが目立つ。特に問題だと思われるのがスマホ等に費やす時間が2時間以上という児童が16%、ゲームが3時間以上は37%もいて、全国よりはるかに多い。そしてこの消費時間と学力結果との間に相関が明らかにある。家庭での学習時間も1時間以下が昨年に比べて13%増加した。宿題は98%の児童生徒がやってくる。しかし復習や予習する生徒の割合は全国の半分以下である。読書の時間は国や県に比べても多い。

### 中学3年

生活習慣は国や県と大きく変わらないが、県平均と比べてTVやゲーム、スマホに費やす時間が長い。家庭学習時間は2時間以上する生徒が国や県と比べてもかなり少なく、一方で1時間以下の割合は高い。復習予習する生徒の割合は国の半分以下である。小学校同様に読書の時間や図書館に行く回数等は国県よりも多い。

## 3. 今後の対応

長野県の分析によれば、1. 小中のギャップ、2. A問題B問題のギャップ、の2つのギャップが指摘されており、これらの解消のためには今実施している小中高連携を一層進め、また、知識の詰め込みではなく、道筋や活用を考えさせる授業改善が必要です。また日常から身の回りの現象を不思議に思い、自分で考えてみるという習慣を学校でも家庭でも育てることも大切です。

小学校の生活実態アンケートによれば「算数の授業がよくわかる」、「算数は楽しい」と答えている生徒は国県より3割も多く、特記すべきことです。このことから小学校の算数についてはだいぶ授業改善されてきたと見え、また、中学生も「数学ができるようになりたい」という割合は国県よりも高く、その意識を学習に向かう動機に繋がたいと考えております。

学力テストは小6・中3生の学力しか判断できませんが、本町ではNRTと呼ばれる小中全学年の学力実態がわかる調査も実施しており、小中高連携事業の一環として今年度からはこの結果を用いて、算数数学において各々の学年はどの単元に課題があるのかを分析し、担当教諭が検討しております。このような分析を毎年続けることによってすべての児童生徒の学力を底上げすることが可能と考えられます。

最後に、本町では家庭学習時間が極めて少ない実態が明らかになりましたが、学校とほぼ同じ時間を過ごす家庭での有効な方策を講じないと学力向上は望めません。小学校段階では保護者の働きかけが重要な要素となることが全国調査でも明らかになっているので、ご家庭でも協力をお願いするとともに、中学では家庭学習の充実を図るために「学習の手引き」を作成しており、参考にしていただきたいと思います。